

## 室戸ジオパークのボトムアップ運営 Bottom-up Management of Muroto Global Geopark

柴田 伊廣<sup>1\*</sup>, 柚洞 一央<sup>1</sup>

Tadahiro Shibata<sup>1\*</sup>, Kazuhiro Yuhora<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 室戸ジオパーク推進協議会

<sup>1</sup>Muroto Geopark Promotion Committee

地域資源を保護だけでなく地域住民が主体的に活用することによって、持続可能な社会をつくることは、世界や日本のジオパークネットワークに加盟する地域に課せられた責任である。世界ジオパークネットワークに参加するためのガイドラインでは、“local”という言葉が繰り返されている。「運営および地域との関わり」の項目には「ジオパークの設立は、地元の強い支援を得て、地域を取り込み、ボトムアップ的なやり方ですすめてゆくべきです。必要な財源の供与を含めて、地方行政や地域社会の指導者から強い支持があることをアピールしてください。ジオパークは運営を専門的に担当する有効な機構を持ち、ジオパーク全域に持続的な地域社会経済や文化の発展をもたらすような政策や行動を実現させるものでなくてはなりません。地元の強力な参加なしには、ジオパークという構想は成功しないのです。つまり、ジオパーク設立の構想とは、地域の景観を守りつつ、地域社会と地元住民の経済的必要性に合った経済運営計画の作成や実施に深く関わっている地域社会や自治体から生まれるものなのです。」とある。2012年11月に室戸で実施された日本ジオパーク全国大会においても、地域住民とジオパークの関わりについて議論され、大会宣言に盛り込まれている。

しかしながら、地域住民とジオパーク活動との関わりは地域の事情によって試行錯誤的に推進するしか無く、世界中のジオパークが関わり方や関わっていく過程に課題を抱えている。主にNPO法人や地域団体によって運営されるヨーロッパのジオパークと主に行政が運営する日本のジオパークでは、多少の違いがあるものの共通の課題である。

一方で、室戸ジオパークでは地域住民のボトムアップによるジオパーク運営に向けた2つの取り組みが始まっている。1つ目は、ジオパークの拠点施設整備事業である。2つ目は、室戸ジオ推進協議会の次年度から3年間の実行計画策定である。ジオパークの拠点施設整備事業に関しては、廃校になった中学校校舎を活用するもので、どんな施設にするのがふさわしいのかという議論を、広く地域住民を交えてワークショップを繰り返しながら進めている。観光客のためだけの施設ではなく、地域住民がかかわれる施設にしようというコンセプトで試行錯誤をしている。この施設を見学した人が、室戸ジオのあちこちを実際に見に行きたくなる施設・地域住民が学べる施設・さまざまな人たちのコミュニケーションの場というような案が次々と発言され、中には施設を軸にしたツーリズムについての意見もあった。実行計画策定の議論でも、ワークショップを取り入れている。室戸ジオパークの強み弱みはなんなのかを整理しながら、繰り返して議論している。ただ議論を重ねるだけでなく、GGNガイドラインの概要と、審査員などから室戸ジオに対して課されている「宿題」も参加者に提示して情報を共有し、会員全体で課題を解決する意識づけをした。

このいわばワークショップによる会議運営は、室戸ジオパーク推進協議会に関わる団体の会議にも影響を与え始めている。これまで、トップダウンによって運営されていたガイド団体が、来年度から年間計画やガイド養成のスケジュール、新たなジオサイトの発掘、ジオツアーのプログラムの開発などを主体的に実施する動きが芽生えつつある。

今回は、室戸ジオパークに起きたジオパークのボトムアップ運営について、実行計画と拠点施設整備で用いたワークショップ型会議の過程や試行錯誤を例に紹介する。

キーワード: 室戸世界ジオパーク, 運営, 実行計画, ガイドライン, ボトムアップ

Keywords: Muroto Global Geopark, management, action plan, guideline, bottom up